# 満洲国の「闇」

## ―― 親鸞のまなざしに照らしてみる歴史の真実 ――

森　村　森　鳳

### 始めに

私の故郷長春は美しい街である。飛行機から「森の城」といわれる長春を見下すと、緑に覆われたこの城は、広々と広がる東北平原の黒い大地にはめてこまれている一塊の緑の翡翠のようである。

長春を訪れる人々は、長春駅を出たと、ほとんど目の前に現れる風景に驚かされる。駅広場からは、幅56メートルの「人民大街」（旧満州の「大同通り」）が、長さ13.77キロメートルにわたって、一直線に南下していく。それは内側から往復4車両の車道・自転車道・歩道、車道と自転車道とサンドイッチのように構成された道路である。そして、自転車道と歩道の間には4列の楊柳（ハコ柳・ポプラ木と同属）の街路樹が、高く広々と伸びて、道路を覆っている。スズランに似たロマンチックな形の街灯が並び立っていた。配線を地下に埋めたため、街路樹の枝を切らずに済むので、80年来伸び放題であった。一直線の道であるが、もともと小河川が走る起伏のある丘陵の地形を生かして作られた道なので、上から見ると、緩やかに波が立って流れる緑の川のようである。夏、この通りは涼しげな長い緑の回廊である。

市内の面積の一割を公園地が占めている。春は様々な鳥の啾き声で始ま

り、町の広場や公園、小さな空き地に、赤、白、黄色のバラ、杏、桃、桜の花、そしてリラ（丁香、紫丁香）の花などが、相次いで咲く。随所に植えられているリラの花の優雅な香りが町中に漂い、人々の心に薫る。「自然の中に町があり、町の中に自然がある」と長春の人々は、この町の美しさに誇りを持っている。

長春駅から500メートル離れ、「人民大街」の西側に、「省委機関幼稚園」がある。それは旧満州時代の「新京神社」で、私が子供の時かよった幼稚園である。旧満州の時代、市内電車がここを通ると、車内の人々が立ちあがって神社に遙拝しなければならないことが親の世代の人々から聞いた。また「人民大街」の真ん中の西に、現在の長春市61中学校があり、それは私が大学卒業してから最初務めた中学校で、旧満州時代の浄土真宗西本願寺の旧跡である。その建物は、今学校の図書館として利用されている。

「塞外の春城」と呼ばれる長春。森と湖が映し合い、四季折々の変化が楽しめる。公園の湖で、兄弟4人が父と一緒にボートを漕いだこと、夏は水泳をし、冬はスケートを楽しみ、一年を通して自然を満喫して、私は少女時代を過ごした。私の故郷への思い出は、長春の美しさによって織りなされている。

長春は日本人が作った街である。1931年、日本人は中国の東北地方に入って、そこで満州国という国をつくった。その時長春は、満洲国の都とされ、新京と名づけられた。

80年前、旧満州の時代に日本人が作ったこの美しい町は、後に、中国の人々にも心血を注がれて、今、現代的な風貌を加え、いっそう美しく輝いている。



しかし、その美しさに触れるたびに、心身の奥に蠢く痛みに耐えなければならない。この町のいたるところに刻まれた八十年の「血雨腥風」を伴う人間同士の戦いの痕跡、土の下に埋もれている数十万の犠牲者の白骨、

よみがえる呻き声と泣き声……、この美しく輝いている町の中に漂っている冷たく、重たく、寂しい気配が正直に感覚に任せるならば、誰もが感じられるであろう。

それでも、八十年来移り変わるイデオロギーの時代、旧満州を生きていた父と母、そして私も、人間闘争の刃に傷だらけになり、人間の残酷さにおびえながらも、ついに人間への最後の信頼を失わなかった。

美しさを愛する心、冷酷さ、残虐さ、そしてぬくもり……人間とは？今回は、親鸞のまなざしを光源にしながら、このスフィンクスの謎を解いていくことにする。

> 諸凡夫病有三種。一者貪欲、二者瞋恚三者愚痴[1]。
>
> もとは無明の酒に酔ひて、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみ好みめしあうて候ひつるに、仏のちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞかし。
>
> しかるになほ酔ひもさめやらぬに、かさねて酔ひをすすめ、毒も消えやらぬになほ毒をすすめられ候ふらんこそ、あさましく候へ[2]。

親鸞は人間を三毒に囚われる存在として捉えている。三毒とは、食愛・瞋憎・愚痴である。貪愛とは食慾と愛慾であり、瞋憎とは怒りと憎しみである。三毒の元は愚痴である。愚痴は普段日本語の中で使う愚痴とは異なる。如来の大慈大悲之心の働きを智慧というのに対して、人間の計らいを愚痴という。「愚痴」に主に二つの特徴がある。それは自我執着心と分別心である。自我執着心とは、自我を中心にする心の働きである。分かりやすく言うならば、物事をするとき自分に有利に働くようにする心の働きである。分別心とは、物事を二元対立的にとらえる心の働きである。（例え

ば、善ＶＳ悪、勝ＶＳ敗、正ＶＳ誤など）自我執着心と分別心が煽りあい、生かしあうものである。

自我拡大を目指し、二元対立項において、自己を「正」の場に置き正当化しようとするのは三毒にとらわれる人間の本質である。

この自我執着心と分別心を抱え人類は、自らの自我拡大行為を正当化し、邪魔ものを排除し、征服し、強者が弱者を征服する道を歩み行き、「勝者王侯、敗者賊（勝者は王侯となり、敗者は匪賊となる）」という常識的な歴史観を定めている。「歴史は勝者によって書かれる」と言われるとおりに、人類の歴史は、まさに各時代の勝者の都合によって添削され書かれるものだとも言えよう。満洲国の歴史は特にその特徴が目立つ。

親鸞の思想を特徴づける「悪人正機」の「悪人」は様々に解釈されるが、その根本的な意味は、

> 一切群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染悪して、清浄の心なし[3]。

と言われる通りに、三毒に囚われる人間存在の本質を意味するのである。世の中の人々は様々な姿をしているが、その異なりは、彼岸のまなざしに照らされると、衣服の色の異なりにすぎない。赤裸々になる「人」は例外なく、三毒にとらわれる存在である。ここに仏教、また親鸞においての人間の悪としての存在の絶対平等性がある。

満洲国とその背景になる日中戦争も、第二次世界大戦も、このような三毒に囚われる人間同士が共同で起こした歴史的な悲劇である。



では、親鸞の視座照らして、常識的な歴史観の偏光フィルターをかけられた満州国とその時代の真の姿を探ってみよう。

## 一　満洲国の誕生

今からおよそ80年前に、わたしの故郷に起こった歴史の流れを決定する出来事である。

200年前の産業革命によって、人間の生産力は飛躍的に伸び、人間の類としての自我を中心にして、人間の所有を拡大しようと、人間の都合で自然を改造し、地球規模の環境が変化するまでに至る。

国と国の関係の中でも、集団的な自我を拡大しようとする傾向が生じる。産業革命の進歩に従って、武器の開発も飛躍的な進化する。強者と弱者の落差が生じ、軍事強国が生まれた。彼らは領土拡大を目指し、軍事的な力の強さによって弱い国に対する占領と略奪を開始した。

日本は強国の中のひとつになった。1868年の明治維新に前後して、日本は科学技術を重視し、欧米の文物や制度を受け入れて富国強兵に成功した。特に、日清戦争の勝利後、「日本は一躍世界の強国に伍することを得」[(4)]、日本は東アジアの先頭ランナーに浮上した。日本の強さとアジア諸国の弱さは日本の自我中心、自我拡大の欲望を煽った。

日本民族は、さらなる自己拡大の可能性を感じ、内部にその情熱滾り、日本をアジアの盟主にさらに世界の盟主に押し上げようと夢を膨らませていた。日本をアジアに君臨する世界一の大帝国に押し上げたいという欲望はだんだんと一種の民族心理として、一人一人の日本人の心の奥深くに滋生する。この民族心理の土壌には、国民道徳の根源、国民教育の基本理念天皇制教育の主柱という教育勅語によって代表される日本の昭和戦時期の狂熱な国体教育によって、「尊王愛国」「忠君愛国」は一人一人の日本人の肉体に教え込まれた。天皇に対する絶対服従の不動の信念は日本での天皇の神格化という「現人神の信仰」の時代風潮の中で、歪まれていく。人間

の集合無意識の深層部に潜む聖なるものへと帰依の対象を生身の人間である天皇に人格化されることと、生身の人間である天皇を超越的な座に伸し上げ、神格化されたことの結合。それによって、「尊王愛国」「忠君愛国」など世間的な理念は神聖化され、日本をアジアに君臨する世界一の大帝国に伸し上げたい、日本が世界を支配するという集団的な欲望は正当化され、美化され、聖なる色彩を持つようになった。正当化された欲望と誠実な宗教感情、聖なるものへ帰依する強烈な願望の結合。それは、日本人の心身の奥底から、献身的な衝動をくみ上げた。

自我拡大の欲望は、集団の欲望をまとめ、行動に導くリーダーを待ちわびている。時代の要望に応じて、さまざまな役割を果たすリーダーが生まれた。

「開拓彊域布威四方」という領土の拡大と資源の開発を目指す国策を作り、台湾、朝鮮、中国大陸を占領する軍事行動を行った明治天皇。

「人類の思想信仰の統一は結局人類が日本国体の霊力に目覚めた時、初めて達成せられる。さらに端的に言えば、現人神たる天皇の御存在が世界統一の霊力である」(5) と主張する「日本の侵略拡張政策の理論の奠基人」(6) といわれる石原莞爾。

「我国二在テ機軸トスベキハ、独り皇室アルノミ」と、日本の近代国家体制を建設するにあたって、ちょうどヨーロッパ諸国においてキリスト教がもたらしていると同じ精神的「機軸」の必要性を痛感し、皇室崇拝を持ってこれの代用品たらしめようと、「忠君愛国」の新興宗教の開祖である伊藤博文。

九五

また、日中戦争の引き金となった「柳条湖事件」を引き起こした石原莞爾と板垣征四郎。

次々と武力で中国の東北地方を占領し、満州国を作り、さらに、南方の大都市も武力で占領し、暴走した関東軍を率いている司令官たち。

集団の期待に応じて、集団の心理的な土壌に生まれたリーダーであるが、いったんリーダーになると、反作用力を持ち、集団を強制し、支配し、集団の運命を操るものになる。

これらの「忠君愛国」のリーダーたちの精いっぱいの努力、知恵を尽くした思考や判断によってこそ、日本は一歩一歩と侵略戦争の泥沼に深く導かれていった。

個々の時期において役目の異なりはあったものの、日本をアジアに君臨する世界一の大帝国に伸し上げ、日本が世界を支配するのだという当時の日本民族の願いは一貫して遂行され、拡大され続けるのである。

このようにして、日本はヨーロッパ文明の先進の科学技術と軍事力を身に着けたが、それとバランスをとるヨーロッパ文明の「自由、平等、博愛、民主」という思想、つまり、人類の欲望的な衝動を拘束する抑制力を身に着けなかった。また、急いで千年以来中国から学んだ倫理道徳観を否定したが、それを上回る倫理道徳を建立しないまま、露骨な集団の欲望の姿で激動的な時代の国際の舞台に登場した。

まずは、欲望を実現する最大の矛盾、日本の生まれつきの弱点、国の小ささ・資源と人力の少なさという矛盾を解決するために、日本は隣の国の中国の満州（東北地方）に目を向けた。「満蒙は日本の生命線」！この満州を手に入れられるかは、日本の命運にかかるものである。この場所を中国から切り離して、日本の勢力下におくことが国策として定められた。いわゆる「対満蒙方策」である。

もともと、日本は日露戦争の勝利に中国東北部に様々な権益を得た。それらは清朝政府と条約を結び、承認させたものであった。しかし、孫文の革命の勝利によって、清王朝は滅びた。このようにして、日本と清朝政府の間の条約は新しい支配者にとって無効なものになる。日本の権益が脅かされることになる。自我拡大を目指す人間にとっては、すでに拡大された

自我を縮小させることは許し難いことである。1928年、満州を支配する軍閥の張学良は蒋介石が主席を務める国民政府に加わり、満州での日本権益を否定する計画を進めた。日本は当時国際的に通用する法律に基づき、張学良の行為を条約に違反することとみなし、日本の権益を侵害することだと考えた。「満蒙の権益の重要性」、「先輩の血と汗の犠牲で得た権益が排日運動の高まりの中で蹂躙され、（中略）日本は正々堂々たる日本の主張と日本の立場とは、何処の国に対しても遠慮や機嫌の必要はないものと固く信ずる」(7) と、武力行使によって、祖国の既得権益を守り、さらに自国の権益を拡大しようとする気運が、当時の日本の国民の間に広く浸透していった。

このような時代の雰囲気の中で、もともと治安を維持するために中国に駐在した関東軍は、石原莞爾をはじめ、事前に周密に計画したうえ、柳条湖事件を起こし、続いて満州事変に暴走し、翌日、奉天（今の瀋陽）、長春、営口を占領した。「満州事変は石原の周到なる、勝丹に作戦のみならず、他のあらゆる部面に及ぶ計画と異常の実行力によって関東軍をひきずり、（中略）日本政府を後眼にかけて満州で思う存分暴れまわり瞬く間に満州要部を占領して、……神田正種「鴨緑江」「満州事変は石原一人の仕事で」とも言われた(8)。

この満州事変は、当時の日本にとっては一石二鳥のことであった。一つでは、経済面では、当時、日本の国内では、関東大震災が生み出した金融恐慌の傷が癒えないうちに、「世界的な経済危機の波が押し寄せてきて日本経済は大恐慌と金融解禁、テフレで打ちのめされてしまった。さらに大凶作が農村を襲い、役所に「身売り」相談の掲示までが出される始末だった。」(9)「満州」の出現と戦争のエスカレートが経済危機による日本の困窮形態を転向させる機縁となった。

もう一つ、日本が長い間、抱えている「満蒙問題」が決着の段階に突入

したことである。日本は中国の東北地方を占領し、そしてアジアの盟主、世界の盟主となる戦略の第一の目標を果たした。

石原莞爾は満州国を産む親といわれているが、彼は満州事変の張本人、政府と軍を率いて満州国を出現させた。彼がいなければ、このすべてがなかったかもしれない。

関東軍が柳条湖事件を契機として満州全域を占領し、満州国を成立するに至る約六ヵ月間の中で石原が果たした役割は大きかったそうである。その功績で石原は、勲四等の勲章、功三級金鵄勲章授与され、「殊勲甲」を受け、国民の抗戦ブームの中で、ヒーローとなり、高名を得た。

満州事変のあと、国民党の東北軍司令を務めた張学良は、蒋介石の指示に従い、日本に対して不抵抗政策をとり、東北軍10余万の人を率いて東北から山海関へと撤退した。日本軍は本格的な戦いもせずに、半年も経たないうちに、やすやすと、東北三省百万平方キロメートルの土地を手に入れた。柳条湖事件を契機に日本は満州全土を制圧し、1932年3月、清朝最後の皇帝・溥儀を執政にする満州国の建国が宣言された。関東軍は占拠した地域を中国から独立させるため、日本の傀儡国家を建立したのである。

この柳条湖事件、満州事変、満州国のいわゆる「成功」は、戦術と戦略の視点からいえば、戦術の成功としかいえず、とても戦略上での成功とはいえない。

当時、中国の最高指導者である蒋介石が四つの敵に直面していた。一つは、長江の大水害であった。二つめには山西の軍閥閻錫山、三つめは、西北の軍閥馮玉祥である。第四はすなわち、最大の敵中国共産党である。

以上の困難な状況に直面して、日本の突然の行動に対して、蒋介石は「不抵抗」の政策をとった。国民党軍の東北軍の撤退は、当時日本側が大げさに宣伝した「日本軍の神速果敢なる行動によって一挙満州から掃蕩された」[10] というほどの「掃蕩」はなかった。確かに戦っても勝ち目がない

状況下での撤退であるが、さんざん破られてからの敗退ではなく、戦わない撤退、軍の実力をあまり損失しない撤退である。いわゆる「走為上（に走ぐるを上と為す「兵法36計」第36計）」[11] という策略である。即ち、勝算のない時は戦いを避けるのは最善の策略だという。それは当時の形勢に対して、とらざるを得ない戦略であった。武器も、兵隊の素質も圧倒的に優勢を持ち、勢いにのった日本軍の衝撃には、中国軍隊が正面きって衝突するならば、紙を持って釘に当たるという喩え通り、無駄の犠牲になるほかない。「強而避之」（強くしてこれを避ける）[12]。これは兵法の常識である。いわゆる「速戦即決」という「速決戦」をすることは、はっきり日本軍に有利である。

「不抵抗」とも、「緩兵の計」である。その時から長期作戦の戦略は蒋介石の中に、企てられつつあった。そして軍隊を近代化し、経済を発展させ、勝ち目が出てきたところで、日本と戦う、「先安内後攘外」（国内の安定化を優先し、その後で大概の危機に当たる）という長期計画を立てたのである。（『我做蒋介石特勤总督四十年』黄仁霖）

日本軍の致命的な弱点と中国の根本的な優勢をも蒋介石は見逃しなかった。中国の広大な国土と膨大な人口を支配し、統制することは、当時の日本の国力と人力で言えば不可能である。占領されたといえども、日本軍が駐留することは、釘づけとしか言えないことである。駐留場所が増えれば増えるほど、日本軍の荷物が増え、戦闘力が弱体化していく、とわかっていたからである。

当面の措置として、蒋介石は国連の介入を求めた。これはまた兵法上での「借刀殺人」（自軍の力を温存して、第三者に敵攻撃させる）の計である。



このような背景があった後に誕生する「満州国」。実は誕生する前にすでに致命的なコンプレックスを抱えている。「満州国」を産む「親」。彼ら

は、中国の現実と国際的な状況を無視して、時間的にも空間的にも、鳥瞰的な視野を持たずに、似て非なる理想、天才の頭脳の奇想天外、個人的な陰謀と果敢な行動によって無理やりに「満州国」を生み出したのである。国の成立に必要不可欠の礎、必然性と堅実で理性的な統帥者を欠いたまま、作り上げられた満州国は、最初から悪戯性と幻性を帯びた蜃気楼に過ぎなかった。歴史の流れの中で日本は、とことんまで、「漁夫の利」の中の「鷸」の役割を果たした。満州国は、束の間の輝きを放ってわずか14年間存在して、歴史の舞台から姿を消した。

14年間、日本人は武力を恃み、略奪、鎮圧、差別、生体解剖、細菌部隊、鴉片など、悪行のやり放題であった。わずか14年間存在したこの国には「貪瞋邪虚偽、奸詐百端、悪性難侵、事同蛇蠍」[13] という欲望にとらわれた人間の本質が集団的に赤裸々に露出した時、どうであるか、満州国はその姿を見せつけた。

しかし、わずか14年間存在したこの国は、人類史上に例と見ない異彩を放った国だったともいえる。歴史の流れに埋もれたこの「満州国」は、かつて、人々に新たな夢を与え、さまざまな能力を生かし、生命エネルギーを最大限に燃焼させ、豊かな人生の味を味わわせ、多彩な人生ドラマを演出させる舞台でもある。これはまた、各民族の人々が不思議に出会い、軋轢を生じあいながらも支え合い、ともに人間的なぬくもりを醸し出す暮らしの場であった。14年間生きていた人々は、この幻の国という人生の舞台で精いっぱいに、人生を営み、誠実に真剣に与えられる役割を果たそうとした。東条英機も、石原莞爾も、甘粕正彦も、中国人も日本人も朝鮮人も、ロシヤ人も、また私の両親も……

## 二「勝者王侯、敗者賊」の歴史観の論理

1945年8月15日、15年にわたる日中戦争に終止符を打ち、第二次世界大戦が終わった。1931年、柳条湖事件が開幕のベルとなった満洲国は、大河の中の一粒の砂のように、時代の大いなる渦に巻き込まれているうちに、沈んでいった。

一人一人の個人、あるいは、一つ一つの集団が自我中心的な渦を渦巻き始め、その渦を広げようと、動き、ついに小さい渦が大きな渦に飲み込まれ、次第に最も強い中心的な渦が形成され、時代の巨大な渦になっていく。そして、その巨大な渦はいかなる力も抗うことができない勢いで地球人類を巻き込み、惨劇を繰り返しながらさらに渦巻いていく。

石原莞爾の夢は、国際的な犯罪の形で始まり、戦争犯罪という定説に終わった。15年間も続いた戦争の中で、日本人310万人、中国人3000万人もが犠牲になった。満洲事変の立役者、中国侵略の第一人者と言われる石原莞爾は、「死有余辜」(死んでも補いきれない)といわれたとおり、許されない罪を負って戦争犯罪者として歴史の記録に名を刻まれた。

第二次世界大戦が終わったとき、「勝者王侯、敗者賊(勝者は王侯となり、敗者は匪賊となる)」という人類の歴史観の論理によって、各国のヒーローたちは、それぞれ英雄にたてられたり、戦犯として罰せられたりした。日本の一時代のヒーローたち、稲垣征二郎、東条英機、甘粕正彦らは、犯罪者として、史書に記録されることになった。「罪有応得(自業自得)」といおうか、彼らが犯した罪からいえば、至極当然の成り行きと言える。しかし、他でもない彼らこそが犯罪者だと言い切れるか。人類は長い歴史の歩みの中で、戦争の罪を清算する時、個別な悪人に責任を負わせることも慣例であった。

しかし、この慣例は人間心理に固定的な観念をもたらす。これらの悪人こそ戦争の張本人である、彼らさえいなければ、戦争の悲劇が生じないはずだと言う観念。ヒットラーさえいなければ、日本の一握りの軍国主義者さえいなければ第二次世界大戦はなかったであろうという心理になる。

しかし、事実はそう簡単ではない。確かに、ヒートラや日本の一握りの軍国主義者の敗北によって、第二次世界大戦は終わった。しかし、他の人物によって、他の形で、戦争は起こされ続けている。一握りの戦犯が歴史の舞台から姿を消した後も、人類の戦争犯罪は後を絶たない。

罪悪を個別の人間によるものとして片づけて個別の犯罪者を懲罰することで、解決済にするというのは常識的なやり方である。もちろん個別な人間が犯した罪を清算しなければならない。しかし、個別の犯罪者を懲罰するところにとどまれば、人々に個別な悪人に注目させ、彼らを恨み、酷評するのみである。その結果、より普遍的な人類の悪、より深い罪悪の根源を求めずに終わってしまう。

善・悪という秤は、人間社会の秩序を維持するには、欠かすことのできないものである。しかし、その秤は、三毒にとらわれる人間の集団である人間社会においては、定かではないものである。それは常に人間の都合によって修正されたり、破られたりする危うさを伴っている。例えば、平和の時代で、殺人が犯罪行為であるが、戦争の時代には、法律に武器を以て相手の国の兵士を殺すことが無罪であるという項目がある。つまり、もともと罪である殺人は、人間に都合によって法律が修正されたため、無罪になるのである。こういう集団に生きている限り、人間は誰であっても、善・悪という秤の「悪」という落とし穴に陥る可能性を抱えている。



その可能性は、時代の渦中に誕生した満州国に生きる者にとっては、とりわけ高い。「激動の昭和」と言われる時代。社会様相は短期間に移り変わっていく。それに従い、善・悪という秤が時代の嵐の中で激しく揺れ動

き、極めて短い時間に目まぐるしく変化する。また、同じ期間においても、さまざまな勢力がしのぎを削る中で、集団によって、立場によって、善・悪という秤がさまざまであった。

## 三　隠蔽された闇―戦争の心理的な根源

ほとんどの人は、戦争を忌避し戦争はない方がよいと思っているであろう。しかし、いくら戦争を忌避しても戦争をなくすことができない。人類の歴史は戦争の歴史と言いかえても差し支えないであろう。国家というシステムが存在する限り、これからの人類の歩みも戦争を伴っていくにちがいない。なぜであろうか。

親鸞は人間を三毒に囚われる存在として捉えている。三毒とは、食愛・瞋憎・愚痴である。貪愛とは食慾と愛慾であり、瞋憎とは怒りと憎しみである。三毒の元は愚痴である。

「愚痴」に主に二つの特徴がある。それは自我執着心と分別心である。自我執着心により、自我中心的になり、自我拡大を目指し、自我以外のもの（他者・環境）を対立視し、支配しようとする。分別心により、善・悪二元対立的に物事を判断し、自己を善の方に置こうと働く。

自我執着心と分別心により、人間の心の奥深いところに一つ隠蔽された欲望がひそかに育まれている。それは、世の中に自分より劣った者を見出して、その存在を証明する喜びを求めることである。この欲望は、物欲や名誉欲や食欲などのように形を取ったものではなく、欲望として意識されていないが、実に如何なる欲望よりも深く求められ、人間の心理に最も満足感を与えるものである。



これこそ、いじめや差別や征服欲などの心理の根源である。暴力的ないじめは、すなわちこの隠蔽された欲望を肉体的に満たそうとする現れであ

る。

人類はこの欲望を元に強者が弱者を征服する道を歩んでいく。その根源を親鸞のまなざしに照らして、旧満州の時代の人間の本質を探って見ようと思う。

平和の時代、法律や倫理道徳が定められ、重んじられ、集団の秩序を乱すものとして、制圧される対象になるが、戦争時下では、この欲望こそ有効に利用されるものになる。戦争は、集団（拡大された自我）が欲望の満足を求める行いである。"正義のために戦う"、"国のために戦う"、"人民のために戦う"など戦争に動員する為にかかげられた大義名分、その本質は陰湿なところに蠢いた個人個人の欲望を集団の欲望として集団の中で正当化するものにすぎない。国を守るために、相手の国の者を多く殺害すればするほど正義であるという戦争の論理が成り立つ。このような論理は、欲望を煽り、殺人行為に誇りを感じる心理と感覚を生み、正義感に煽られた欲望は歯止めが利かなくなり、夥しい数の人間が人間によって殺された。

第二次世界大戦の時のドイツによるユダヤ人の虐殺、ソ連軍の日本開拓民への殺戮、日中戦争時の日本人兵士の南京での過剰殺戮。無防備な庶民を残虐に殺害する行為は、敵対する勢力を削るという戦争の目的を遥かに超えるものである。痛快さを感じるまでの狂気じみた殺人行為は赤裸々に露出する欲望の具象である。

マルクスの「階級闘争は社会発展の原動力」[15] という階級闘争理論は、プロレタリア階級が今まで彼らを支配してきた一握りの資本者階級を暴力で倒し、自ら支配階級になることを正当化する理論である。これを根拠にし、数千万人の命を代償に、レーニンが指導したロシア革命が成功した。それがスターリンに継がれ、さらに血なまぐさい人間の死を伴い、第二次世界大戦後の社会主義陣営ができあがった。次に、マルクスの「階級闘争」は「マルクス主義の頂点」（文化大革命の時代の日常用語）と言われる毛

沢東によって、「登峯造極」と極点に達した。こうした共産主義革命は、無から有へと、発展し壮大化し、ついに第二次世界大戦後に、資本主義陣営と対抗する一大勢力を形成した。それは何故可能になったのか？

人々の物質への欲望を煽ることによって生産力を促進し、発展を進める資本主義に対して、「階級闘争」に社会発展の原動力を求め、「プロレタリア独裁」を目指する共産主義革命は、物質的な欲望より根深い隠蔽された欲望に訴えているのである。今まで支配され、まったくその欲望を満たす機会のない貧困階層への「支配階級と戦おう！」「彼らの支配者になろう！」という呼びかけは、彼らの中に眠っていた欲望を目ざめさせた。このような共産主義革命は、圧倒的な数である貧しい階層から広大な支持を得るのは、当然の成り行きであろう。

## 四　欲望を巧みに利用する者

この欲望を最も巧みに利用する者は人類史上に於いて毛沢東の右に出るものはない。

中国共産党の成功は、「共産主義の事業と人民の勝利」と言われ続けてきたが、その核心にいた毛沢東の姿を見れば、個人的な野望の成功ともいえよう。毛沢東の野望は彼の若い時に書いた次の詩にはっきり表れている。

江山如此多嬌　引無数英雄競折腰　惜秦皇漢武略輸文彩　唐宗宋祖稍遜風騒　一代天驕成吉思汗　只識弯弓射大雕　俱往矣　数風流人物　還看今朝[江山は此くの如く多（はなは）だ嬌かしく　無数英雄を引いて競って腰を折らしむ　惜むらくは秦皇（秦の始皇帝）と漢武（漢の武帝）はほぼ文彩に輸（おと）り　唐宗（唐の太宗）と宋祖（宋の太宗）は　稍（やや）風騒に遜（ゆず）る　一代の天驕成吉思

八五

汗（ジンギスカン）も　只だ弓を弯いて大雕（鷲）を射るを識るのみ　倶に往きぬ　風流の人物を数えには　還（な）お今朝（今の時代）看よ[16]。

詩の中で、毛沢東は中国歴史上の歴代の王朝の創始者の名をあげ、それぞれの欠点を数え、最後には、我こそが一番だ、と自分こそが新しい世を作る皇帝になると豪語している。こういう太志を抱いて、農民の息子である毛沢東は、三国時代とは比べものにならないほどの20世紀の波乱万丈な大舞台に躍り出て、中国の最高権力者の座をめざし歩み始める。

彼は、日本（外来侵略者）、蒋介石（対立する政党）、劉少奇（党内の政敵）と、次々とライバルを負かし、一人の農民の息子から一歩一歩と、ついに歴代の王朝の創始者を上回る中国の最高権力者の座へと上り詰め、人生の最後までこの最高権力を守り抜くことができた。数十年にわたり、中国大地に埋もれた無数の犠牲者の白骨、数え切れない英雄たちの血にまみれた奮戦、結局、すべては一人の残酷な野心者が新時代の皇帝の座に上るための踏み台となった。

毛沢東がたどって来た道を振り返し、この毛沢東革命成功の方程式を親鸞の視座から解き明かしよう。

毛沢東の聡明な頭脳や優れた戦略思想や人格の魅力などがよく語られるが、それらがないわけはないが、毛沢東の成功の決定的な要素は、孔明に匹敵する非凡な知力、劉備を上回る人格の魅力、曹操を超える優れた政治才能でもなく、他にある。

『孫子の兵法』には戦の指導者が犯しがちな五つの錯誤の一つとして、「愛民可煩」（愛民は煩わすべし）をあげた。戦争の指導者が民や部下への愛しみの気持ちが過ぎれば彼らを冷酷に扱うべき時に出来ず、苦悩するという可能性があると警戒する。戦の勝利と人民の命の保全、二者が矛盾す

る時、どうすべきか。これは、古来、儒教文化の薫陶を受けた中国の政治家たちに悩ませる困難な課題の一つである。それは、「長坂の戦い」人民を抱えて逃亡した結果、自らが絶体絶命の状態に陥った劉備や部下と人民の犠牲に涙を流し自分を責める蒋介石や天安門事件の後、後悔した鄧小平などの姿勢に窺える。しかし、この困難な課題は毛沢東には問題にならなかった。なぜなら、「我々革命的な功利主義者」という毛沢東自身の言葉に表されたとおりに、彼は "革命" という大義名分で自我中心的な"功利"を正当化した。

毛沢東においての "革命" とは、

> 革命は暴動であり、一つの階級が一つの階級を倒す暴烈的な行動である[17]

このような "革命" によって正当化された "功利"。二者が煽りあうことによってもたらすものは何なのか。歴史家のR・J・ラメルの文を借りてみよう。

> 毛沢東は20世紀に数多くいる邪悪な成功者らしいリーダーの中でもっとも邪悪な成功者らしいリーダーであった。彼は30年間にわたり、世界人口の4分の1に対し絶対的な権力を行使していたのである。（中略）毛沢東のひどく血なまぐさい統治を概観してみよう。1900年から1987年までのすべての戦争で戦闘によって3402万1千人が死んだ。これは2度の世界大戦、ベトナム戦争、朝鮮戦争、メキシコとロシアでの革命を含めた数だ。毛沢東は一人でその2倍の人間を殺しているので」[18]

伝統的な道徳倫理を否定する "革命" に煽られる "功利"。毛沢東はそれをよりどころに凡ての倫理道徳の拘束から自らを解放し、恐れるものが何一つもなくなる。"革命的功利" のために、彼は迷わずに人民を犠牲にする、しかもそれに罪意識なく、その犠牲を最小限に抑えようとする努力さえしなかった。これほど戦争の論理を極まる冷酷さは、当に「狼戾賊忍、暴虐不仁、自书契已来，殆未之有也」(暴戾残忍、残虐非道であり、史書記録以来、未曽有である」[19] と、有史以来の最大の極悪人と称された董卓も見劣りするものである。

こういう毛沢東の成功を根底から支えていたのは、階級闘争理論である。毛沢東は、マルクスの「階級闘争」に出会ったとき、目から鱗、わが意を得たと喜んだ。

> 1920年、私は、(考茨基) 著の『階級闘争』を (中略) 読み、陳望道が翻译した『共産党宣言』とあるイギリス人が書いた『社会主義史』を読み、始めて有史以来、人類に階級闘争があり、階級闘争が社会発展の原動力であることを知り、問題を認識する基本的な方法論を得た。しかし、これらの本には、中国の湖南や湖北などもなく、中国の蒋介石と陳独秀もない。私は、その中から「階級闘争」という四つの文字を取り出し、真剣に実際の階級闘争を研究し始めた[20]。

この出会いは、毛沢東に大中国を支配する "秘訣" を与え、彼は至宝を得た気持ちで、「階級闘争、一抓就霊 (階級闘争を掴むと、霊験がある)」という名言を吐いた。この至理名言によって、人間の心の奥深く隠された欲望を、もっとも効果的に利用する道が示されたのである。「霊 (霊験)」と言う言葉は、この欲望に潜在する恐ろしいパワーとその利用価値をよく表している。毛沢東はここで人民の欲望を自分の権力取得と権力維持に利

用する方向へ導くヒントを得た。

まず、毛沢東は、三国時代の英雄たちが目指す「天下統一」より大きなスケールの「天下統一」——「全人類の解放」という遠大な共産主義の理想と「貧しい人を救う」という中国の現実にふさわしいスローガンを掲げ、貧困に苦しんでいた中国の民衆と新しい時代を拓こうとする革命者たちを魅了して、彼らをいわゆる革命陣営に呼びよせてきた。

それと同時に、貧しい人々に "人民革命" によって支配者になろうと呼び掛け、金持ちを "階級の敵人" という標的にする。それによって、毛沢東は最も貧困層が多い中国で、最大の支持を得て、執政者を打倒し、革命の成功を収め、国の最高権力者になった。政権を取得した後、毛沢東は、人民を幸せにしようとか、国を豊かにしようとかという一国の指導者として取るべき経済的発展などに努めず、人民に物質的な利益や文化的な潤いなども与えなかったが、人民を満足させるものを与えた。それは、毛沢東時代の中国の国是——「階級闘争」である。

毛沢東は、「倒された階級敵人が失ったものを取り戻そうと、常にわれわれのプロレタリア政権の転覆を狙っていて、彼らに対する闘争を続けなければならない」と、自らの都合によってマルクスの「階級闘争」理論を歪曲（自らが「発展」と言う）し、プロレタリア独裁下の持続革命論を長期にわたって強制的に中国人民の脳裏に教え叩き込んだ。その名目下で、元地主・元富農、元資本家、あるいは元国民党政府の人間を人民の敵と定め、彼らから基本的な人権を剥奪し、経済的にも、社会地位も、最低層に置いた。

八一　そして、人民に彼らを監視するように言い付け、「階級教育」という名目で定期的に、彼らの罪を摘発する「訴苦会（階級の敵人にいじめられる苦しみを訴える）」が開かれる。「訴苦会」で訴える人は階級の敵にされた人の前で、泣きながら "いじめられた事実"（ほとんど作り話）を訴えた。

感情が高ぶって、興奮状態になった人民が階級敵人を罵ったり、暴力を振るったりすることは、慣例となった。こうして、人民の中で階級の敵を人為的に作り、人民に彼らをいじめる権利を与えた。

毛沢東の時代は、中国の歴史上未曽有の独裁政治である。中国人民は、以前より貧しい生活を強いられながらも、世の中に常に自分より劣った者が存在することを実感し、彼らへの侮辱や暴力が正当化されることに満足し、それを実行することに、喜びを味わった。そういう人民たちは、毛沢東を支持し、毛沢東に感謝した。毛沢東時代、殺人などの刑事犯罪は最も少なかった。毛沢東政権に反対する社会勢力が存在しなかった理由はここにもあるだろう。そこへ赴くべきエネルギーを階級敵人に向かわせていたからである。

1949年10月1日、最初に、天安門城楼に立ち「中国人民が立ちあがった」と宣言してから、1979年に死ぬまで、毎年建国日に天安門城楼に立って、和やかに微笑みながら人民に手を振る毛沢東。その姿には、穏やかな安心感や自信をが感じられる。その毛沢東のまなざしには数千万人（中国人の中で1割の人民の敵が存在していると主張される）の人間が虐げられる様子が映されていたであろう。これらの「階級闘争」の生贄が存在すればこそ、毛沢東の裏側からそれほどの余裕に満ちた微笑みが生み出されたともいえよう。

毛沢東が中国を支配する17年間（1949～1976年）、次々と運動を行ない、新たな階級敵人の名目を立て、常に人民に「階級敵人を探そう」と呼びかける。それはすなわち、互いに他者を階級敵人にさせようとする運動である。人々は自身が階級敵人にされることを恐れながら、他者を階級敵人にしようと積極的に行動する。毛沢東支配下の新中国での、「非正常死」といわれる、毛沢東の「階級闘争」路線の生贄になった中国人民は数千万人にも及んだ。（正確な統計は、未だに出されていなく、諸説紛々である）

人民を死に追いやった「階級闘争」路線の遂行者である毛沢東は決して許されるものではないが、"7000万人"といわれる死者の中で、毛沢東自身に殺された者は一人もいない、殺人者は人民そのものである。

無から有へ、小から大へと、毛沢東成功の方程式。それは、革命＋功利―暴力的な行動と正当化される「指導者・人民の欲望」の組み合わせによって成立したのである

このように人間存在の本質をみれば、満洲事変以後、日本軍の戦争の理論根拠といわれた石原莞爾の「最終戦争」・「永久な平和」論（戦争で戦争を終わらせ、永久な平和を実現する）の荒唐無稽さもはっきり見えてくる。欲望の満足を求めるために行われる戦争は、いったん起こると、欲望とを煽りあい、拡大していくほかない。日中戦争も第二次世界大戦もそうであった。起こった戦争は、たとえ収められ、終戦を迎えても、必ず新たな戦争の火の種を蒔くことになる。例えば、第二次世界大戦の後の朝鮮戦争、ベトナム戦争、中国の内戦などである。人類の歩みに伴ってきた戦争は決して戦争によって終わることはない。かつて石原莞爾が掲げた「永久平和」の旗は、自我欺瞞と他者欺瞞にすぎない。理性的な面である程度の誠実さがあったとしても、無意識の中、心の奥裏は全く虚偽である。「（石原莞爾が）中国人の国家統一能力を否定し、中国人を救うのは日本人の天職とした」（（中略）「全世界を天皇の統制化に収める」[21] という言葉の裏には、優越感と征服欲がよく現われている。

三毒にとらわれる人間であれば、例外なく、このような陰湿な欲望を抱えている。そのため、条件によって、悪行の程度の差があるが、誰であっても、恵まれた条件を最大限に利用して、欲望の満足をさせようとする。これこそ人間の本質である。

こう考えると、歴史の中での人間の罪を反省する時、仏教・親鸞の教えの大切さを改めて感じる。それによって人間の深く隠された存在の闇を照

らされると同時に、は今までの常識や倫理道徳や価値観を次元的に更新する道も示唆していると思う。

## 終わり　親鸞が願われた浄土

仏教の根本は慈悲である。慈悲の根本的な意味は、この言葉の語源にも窺える。茲は草の芽と細い糸とを合わせて、小さい者が成長し増えることを示す会意文字。慈（茲＋心）は、茲幼い子供を育む親心のこと。非は、羽が左右に反対に開いたさま。両方に割れる意を含む。悲（非＋心）は心が裂けるような切ない痛みのこと。他者と痛みを共有するという意味合いを顕す。仏教においての慈悲は、親心で他者と痛みや喜びを共有することを意味する。また、「同体大悲」という言葉がある。「同」は、同じ、「同一」を意味する。体はからだ。「悲」は、悲しみという漢字であるが、他者と痛みを共有することを意味する。「同体大悲」とは全ての命が一つの体になるように、全ての命の痛みを自分自身の痛みとして感じることである。仏教においての命の絶対平等性は、このような感覚を基に生じるものである。仏教が人々に教えるのは、こう考えるべきとか、こうすべしということより、実人生感覚の転換を促すことだと思う。たとえば、「同朋」とは親鸞の言葉である。「朋」は、二つの「月」であるが、ここでの「月」は血肉を意味する。同朋の最も根源的な意味は、命と命はすべて血肉がつながっていることである。親鸞・仏教が教えているもっとも大切なことは、他者・他の命と痛みを共有する感覚を育むことだろうか。

親鸞は、1224年が「末法に入りて六百八十三歳なり」(22) と、自らが生きている時代を末法時代と算定し、この時代に阿弥陀浄土に往生することこそ、行方であると強く主張する。

親鸞の他力念仏の思想の中軸に据えられる「南無阿弥陀佛」とは何なの

か。それは言葉の意味を超えるものであるがあえて言葉で解釈すれば、次のようである。

阿弥陀は、無量光（無限な空間）、無量寿（無限な時間）。佛は覚者。大いなる真実に目覚めた者、仏教の根本は慈悲であり、究極的な慈悲は大慈大悲であるということから言えば、阿弥陀仏は人間の計らいを超える、永遠・無限な時間・空間に働く大いなる働きだと言えるであろう。南無は帰依である。人間の計らいを超える大いなる働きへの帰依であろう。

では親鸞の願われた浄土とは？三毒にとらわれる心の働きによって感応される国土は穢土というのに対して、浄土は、清浄なる心の働き（慈悲）に感応される国土である。それは無差別の絶対平等である人類の終極的な理想を示す世界である。

> 親鸞の願われた浄土は、どこかに思い画かれた世界でなかった。（中略）浄土が「帰依」すべきより所であり破闇満願（はあんまんがん）の智慧の「光明」であり、教え導く「導師」であり、この世ならざる永遠の真の彼岸である[23]

では、浄土往生とは何か。

> 往生が場所の移転でなく、質的に主体の転換を指す[24]。

いわゆる「質的に主体の転換」を、親鸞が次のような喩で示している。

七七

> 「凡聖逆謗、ひとしく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるがごとし」[25]

「凡聖逆謗」は三毒にとらわれる人間を、海に陀如来の本願海（大慈大悲の海）を喩えている。さまざまな味の水が海に入り込み、一乙の味になるように、罪悪煩悩を抱える一人一人の衆生が阿弥陀如来の本願に帰依する。「回入」は、三毒にとらわれる心が大慈大悲の海へと転換する道であり、親鸞がたどった浄土往生の道でもあり、「大慈大悲」と衆生が生きている現実とつながる道でもあると思う。「回入」という言葉に親鸞が「すれば」という送り仮名をつけた。仮定形で読むとき、この言葉にありがたさを感じながらも、甘えを許さない厳しさ、親鸞が念仏の道をたどる時の苦悩に満ちた心の葛藤、三毒の中でもがいている痛切な痛みをも感じられる。そのような親鸞の心情を伝える言葉がある。

> 誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし[26]

文の中での "いたむ" を表すには、通常の「痛」という漢字ではなく「傷」という漢字を使い、身に傷つけるほどの痛みを感覚に実感させる一文字である。これこそ、痛みを伴う罪への自覚であり、親鸞が実人生の感覚を以て伝える仏教意味においてでの慙愧なのである。

慙愧の語源は、慙は斬＋心です。斬はざくざくと切り込む。刃が食い込んで、切れ目をつける。慙は心に切り目をいれられたような感じのこと。仏教意味においての慙愧は、世間的な意味での慙愧と異なるところがあり、痛みを伴うものである。人は、世の中に生きる限り、よく生きようとしても、縁あって、無意識にも自我の拡大を目指したり、他者の不幸を以て我が欲望を満たそうとしたりすることがよくある。このような人間存在としての悪を鋭い痛みとして感じる感覚を仏教意味においての慙愧という。

人間存在の罪の場にわが身を置き、すべての人とともに慙愧するという

姿勢。罪ふかい人間の中の一人の親鸞。すべての存在の罪を一身に背負い、すべての人の苦しみをわが身の痛みとして受け止めて、罪悪煩悩の渦にもがいている親鸞。

こういう意味においての慙愧と慈悲を合わせるところには、数千年来踏襲してきた「勝者王侯、敗者賊（勝者は王侯となり、敗者は匪賊となる）」という常識的な歴史観の論理を照らす新たな光源が現れている。

常識的な歴史観の論理をよりどころに、勝者は、凡ての罪を敗者になすりつけ、敗者を匪賊（悪人）と見下す。それに対して敗者は悔しさを抱え、恥を照らす機会を狙い、復讐しようとする心理を育んでいく。このようにして、一つの戦争が終わると同時に、次の戦争の種をまくことになる。これは数千年来人類がくりかしてきた道である。

慙愧と慈悲が重なるところに据えられる親鸞の視座には、人間同士は、勝者も敗者も互いに他者の痛みを共有し、ともに存在の罪を反省し、共に人類の未来をめざす道がかすかに顕れているのではないか。

人類全体の価値観、人生感覚の次元的な転換を実現しなければ、歴史的な悲劇は免れないと考えるとき、その転換する可能性を、ここで、垣間見たようである。

地平線を目指して歩んでいる旅人たち。その旅程で、この感覚を育んでいくならば、命を慈しみ育む新しい道筋が開かれていくであろう。

欲使前生者導後、後生者訪前、連続無窮　願不終止。（　前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして願わくは終止せざらしめんと欲す。[27]）

七五

注

(1) 『教行信証』『真宗聖教全書』二 41 頁　真宗聖教全書　編纂所　大八木　興文堂平成 10 年 2 月再版発行

(2) 「親鸞聖人御消息」広本『真宗聖典』より

(3) 「教行信証」『真宗聖教全書』二真宗聖教全書　編纂所　大八木　興文堂平成 10 年 2 月出版発行

(4) 『日本二千六百年史』大川周明　第一書房　昭和 14 年 12 月

(5) 石原莞爾「戦争史大観」『最終戦争論』毎日ワンズ　2011 年 4 月

(6) 『日本侵華戦争戦犯罪行録』広東高等教育出版社　1995 年 10 月

(7) 『中央公論』1931 年十月号　木庄繁「満州国建設の歴史使命」

(8) 「鈴木貞一談話速記録」下『石原莞爾』安部博行　法政大学出版局　2005 年 9 月

(9) 『図解日本の歴史』小和田哲男　監修　ナツメ社 2008 年 12 月より

(10) 『日本二千六百年歴史』大川周明　昭和 14 年 12 月　第一書房

(11) 『兵法 36 計』より

(12) 『孫子の兵法』より

(13) 『真宗聖教全書』二 41 頁　真宗聖教全書　編纂所　大八木　興文堂平成 10 年 2 月再版発行

(14) 正確的な数字は未だ出されていない。諸説紛々。

(15) (『共産党宣言』マルクス著 1848 年　中央编译出版社 2005 年

(16) 毛沢東＜泌園春・雪＞『毛沢東詩詞全集訳注』陝西人民出版社　2012 年 2 月

(17) 「湖南農民運動考察報告」『毛沢東選集』より人民出版社　1964 年)

(18) バーバラ・オークレ博士著　酒井武志訳『悪の遺伝子』よる。イースト・ブレス 2009 年 6 月

(19) 陈寿《三国志 魏書 董二袁劉傳第六》中華書局出版社 1959 年 12 月

(20) 毛泽东 1941 年 9 月 13 日《关于项村调查》より《毛泽东项村调查文集》所収中共中央文献研究室　2012 年 8 月

(21) 安部博行『石原莞爾』法政大学出版局　2005 年 9 月

(22) 『真宗聖教全書』二 168 頁　真宗聖教全書　編纂所　大八木　興文堂平成 10 年 2 月出版発行

(23) 池田勇諦「親鸞聖人の願われた浄土を聞く」「名古屋御坊」真宗大谷派名古屋別院　2008 年 12 月 10 日)

(24) 同 (23)

(25) 『真宗聖教全書』二 44 頁真宗聖教全書　編纂所　大八木　興文堂　平成 10 年 2 月出版発行

(26) 『真宗聖教全書』二 80 頁真宗聖教全書　編纂所　大八木　興文堂平成 10 年 2 月出版発行
(27) 「教行信証」『真宗聖教全書』二 203 頁真宗聖教全書　編纂所　大八木　興文堂平成 10 年 2 月再版発行

七三